二〇二一年一月一六日

初日の出高層ビルのすき間より　よし子

残んの世夫の分まで老の春　はく子

退院のあるじを迎ふ寒紅梅　む　べ

廃校舎あとに老松色変えず　よし子

大架橋影絵となりし寒夕焼　せいじ

明けやらぬ空に一と声初鴉　わかば

天空に結ぶ噴煙初淺間　愛　正

所在なく糸のさすらふ懸凧　よう子

駅ピアノ演奏中や松の内　かかし

狂言に笑ひ誘はれ明の春　うつぎ

書初や硯の陸の薫り立つ　わかば

ふつふつと味噌桶ならぶ冬灯　なつき

雪間いまホルスタインの模様めく　こすもす

のど飴を舌にまろばせ寒に耐ふ　よし子

マッチ擦る役を賜り初竈　素　秀

広芝に敵味方なく御慶かな　こすもす

朝市の客寄せとなる焚火かな　うつぎ

初霞へと漕ぎ出せる渡舟かな　素　秀

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年一月一八日